

放哉と山頭火

GOTTOTラベルも動きだして、世の中、少しづつだが日常を取りもどしつつあるようだ。とはいえ、コロナ禍発生前のような日常は今後も許されそうにない。現在程度の「自粛」であれば、これが日常だと考えたほうが、まあよさそうにも思う。

以前に比べて、自宅で静かな時を過ごす人がふえたのであろう。読書や音楽などを楽しむ時間が、少なくとも私には随分と多くなつたなと思う。読書といえば、最近、電車の中で文庫本などを開いている人が以前より多くなつたような気がする。

こんな時期に、私の書いた『放哉と山頭火』（ちくま文庫）が増刷されるといふ連絡が入ってきた。ぐうたらな男たちの物語の本が、コロナ禍の中でどうして増刷になるんだらうと思わされる。二人の男の暗鬱なる人生と句が、こういう息苦しい時期だけに、読者の心に沁み入っているのかもしれない。

コロナの不安と恐怖を煽りたてるような情報にばかり接していると、自分で自分が嫌になるような気分になり、自己嫌悪といえれば強すぎ

渡辺利夫（拓殖大学専門顧問）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士筑波大学、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十二月より現職。

だけでも、少なくとも現在の自分を肯定的には受け入れにくくなっているであろう。

にくい顔思ひ出し石ころをける

自らをのしり尽きずあふむけに寝る

自分が生きて在ることに悔恨にも似た気分を生涯にわたって抱きつづけた人物が放哉である。そんな気分から逃れようと、ただただ酒を呑み放浪をつづけたこの男がなぜ読む者の心を捉えるのか。私にもなんだかわかるような気がする。

コロナの禍々しいニュースに記録的な暴風雨やら酷熱の報道が加わる。余剰金が底をついた小規模事業者の倒産件数が激増しつつあるともいわれる。自分分は災禍には遭ってはいないものの、もういい加減にしてくれないか、といった気分が相当な広がりを見せているようだ。放哉と山頭火の句が読む者の胸に響くのは、二人が現代を生きる私どもの息苦しさ

を「代償」してくれているからなのであろう。